

20 世紀後半における 京都の修学旅行の様子と広報物の刊行

江 崎 淳 也

1 はじめに

本論文は、終戦直後から 2000 年（平成 12）までにおける京都市内の修学旅行の様子と、その間に刊行された修学旅行に関する広報物について取り上げる。

京都を含む近畿地方は、人気の修学旅行先として全国の学校から選ばれているといえる。表 1 は、日本修学旅行協会が行った 2018 年（平成 30）度における全国の中学校、高校の修学旅行の行き先に関する調査結果をまとめたものである。表 1 より、中学校では関東、北陸甲信越、中国、四国、九州、沖縄地方の過半数、高校では北海道、東北地方の過半数が近畿地方を修学旅行の行き先に選んでいることがわかる⁽¹⁾。

また、比較的距離の近い名古屋市などでは、小学校の修学旅行の行き先として近畿地方を選ぶ傾向があるといえる。日本修学旅行協会名古屋事務所が 2018 年度に行った調査によると、名古屋市内の公立小学校 261 校のうち、全体の 99.6% にあたる 260 校が修学旅行の行き先として近畿地方を選んでいる⁽²⁾。また、名古屋市以外の東海地方の小学校についても同様の傾向が見られる。表 2 は三重県四日市市、表 3 は岐阜県多治見市の公立小学校における 2019 年度（令和元）の修学旅行の行き先をまとめたものである。表 2 と表 3 より、ホームページ上で修学旅行の行き先を掲載している四日市市と多治見市の公立小学校は、すべて近畿地方を修学旅行の行き先として選んでいることがわかる。また、四日市市唯一の私立小学校である暁小学校についても、奈良・京都・大阪を修学旅行の行き先に選んでいる⁽³⁾。そのため、東海地方の小学校は修学旅行の行き先として、一部地域に例外がある可能性も考えられるものの、一般的には近畿地方を訪れてい

るものと推測される⁽⁴⁾。以上のことから、日本国民の多くが小学校、中学校、高校のいずれかの修学旅行で近畿地方を訪れているものといえる。

このように、京都を含む近畿地方は修学旅行の定番であることから、修学旅行生に対しての観光促進キャンペーンが数多く行われている。京都市や公益社団法人京都市観光協会らによって構成されている京都観光推進協議会では、京都を訪れる修学旅行生や学校関係者に向けたウェブサイト「きょうと修学旅行ナビ」を運営し、修学旅行の見学コースや事前学習資料などを提供している⁽⁵⁾。また、京都市交通局では修学旅行を実施する学校に対して「京都修学旅行 1day チケット」の発売⁽⁶⁾、京都市観光協会で

中学校		旅行先										
		北海道	東北	関東	北陸甲信越	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄	総計
出発地	北海道	16	24	12	0	0	<u>8</u>	1	0	3	0	64
	東北	3	1	147	0	0	<u>37</u>	2	0	1	3	194
	関東	4	13	2	6	2	<u>417</u>	19	0	2	1	466
	北陸甲信越	0	1	31	0	0	<u>165</u>	20	1	2	2	222
	東海	1	1	166	9	7	<u>49</u>	11	0	7	7	258
	近畿	2	3	62	23	11	<u>1</u>	9	4	41	37	193
	中国	0	0	15	0	0	<u>103</u>	0	0	18	13	149
	四国	0	0	4	0	0	<u>57</u>	0	0	9	21	91
	九州	1	0	0	0	2	<u>211</u>	16	0	54	6	290
沖縄	0	0	0	0	0	<u>14</u>	0	0	4	0	18	

高 校		旅行先										
		北海道	東北	関東	北陸甲信越	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄	総計
出 発 地	北海道	0	0	58	0	1	<u>148</u>	18	0	6	18	249
	東北	1	0	0	1	0	<u>315</u>	19	0	2	14	352
	関東	6	2	1	4	2	<u>105</u>	46	10	88	137	401
	北陸甲信越	5	0	23	7	3	<u>30</u>	7	0	29	40	144
	東海	19	0	3	8	0	<u>25</u>	27	15	74	58	229
	近畿	40	3	33	10	0	<u>0</u>	4	1	20	33	144
	中国	15	2	111	10	3	<u>16</u>	0	0	4	6	167
	四国	19	1	70	12	4	<u>7</u>	0	0	0	3	116
	九州	18	12	225	46	0	<u>39</u>	0	0	1	6	347
	沖縄	0	0	14	2	0	<u>2</u>	0	0	0	0	18

※ 1校が複数の都道府県にまたがって旅行した場合、それぞれの都道府県分がカウントされている。(例：京都と奈良が旅行先の場合、近畿に「2」がカウント。) そのため、総計と調査校数は一致していない。

表 1 修学旅行の地域別行き先：(上表) 中学校 (下表) 高校

日本修学旅行協会が 2018 年(平成 30)に全国の中学校・高校を対象に実施した、修学旅行に関するアンケート調査の結果をもとに筆者が作成したもの。

(日本修学旅行協会『教育旅行年報「データブック 2019」』P12-13, 24-25 参考。)

小学校名	行き先	実施年	小学校名	行き先	実施年	小学校名	行き先	実施年
県	京都・神戸	2019	笹川	京都・西宮	2019	羽津北	京都	2019
内部	京都	2019	塩浜	京都	2019	浜田	不明	
内部東	京都	2019	下野	神戸・京都	2019	日永	京都	2019
大谷台	不明		水沢	京都	2018	保々	京都	2019
大矢知興譲	京都	2019	高花平	京都	2019	三重	不明	
小山田	京都	2019	中央	京都	2019	三重北	京都	2019
海蔵	京都	2019	中部西	京都	2018	三重西	京都・西宮	2019
川島	京都	2019	常磐	京都	2019	八郷	京都	2019
河原田	京都・神戸	2018	常磐西	京都	2018	八郷西	不明	
神前	不明		泊山	京都	2019	四郷	京都	2019
楠	京都	2019	富洲原	西宮・京都	2019	橋北	京都・西宮	2019
桜	京都	2017	富田	不明				
桜台	不明		羽津	不明				

※ 2019 年度の行き先が分からない場合は、2 カ年（2017 年度）まで遡って掲載している。
※ ホームページで掲載されていない小学校は「不明」としている。

表 2 三重県四日市市の公立小学校における修学旅行の行き先（2019 年度実施分）
筆者が各小学校のホームページを確認し、まとめたもの。（2022 年 5 月 29 日閲覧）

小学校名	行き先	実施月	小学校名	行き先	実施月
養正	京都・奈良	6 月	滝呂	京都・奈良	6 月
精華	京都・奈良	6 月	南姫	京都・奈良	6 月
共栄	京都・奈良	6 月	根本	京都・奈良	6 月
昭和	京都・奈良	6 月	北栄	京都・奈良	6 月
小泉	京都・奈良	6 月	脇之島	京都・奈良	6 月
池田	京都・奈良	10 月	笠原	京都・奈良	10 月 - 11 月
市之倉	不明	6 月			

表 3 岐阜県多治見市の公立小学校における修学旅行の行き先（2019 年度実施分）
筆者が各小学校のホームページを確認し、まとめたもの。（2022 年 5 月 29 日閲覧）

は班別行動を行う学生に向けて「京都修学旅行パスポート」の配布をするなどの取り組みを行っている⁽⁷⁾。このようにして、市ではインターネットによる情報の発信や公共交通機関、施設等の利用促進キャンペーンを実施しており、京都を訪れた学生に修学旅行を楽しんでもらおうと様々な観光事業を展開している。では、長年修学旅行の定番として知られている京都市において、今日に至るまでどのように観光情報の発信を行ってきたのだろうか。

これまで、戦後以降の京都における修学旅行を取り上げた先行研究として、菅沼（2017）による敗戦後の修学旅行の再開と拡大過程を検証した研

究⁽⁸⁾、山上(2007)による修学旅行の歴史および特徴の整理と今後の活性化についての研究⁽⁹⁾、塚本(1998)による都市型エコ・ツーリズムを利用した修学旅行の企画と実践についての研究⁽¹⁰⁾などが挙げられる。だが、修学旅行に関する観光促進キャンペーンや、広報物に関する研究の存在については確認することができなかった。

そこで、本論文では「終戦直後」(1946年～1963年)、「東海道新幹線および名神高速道路開通後」(1964年～1983年)、「昭和末期から平成初期」(1984年～2000年)と、おおよそ15年から20年ごとに区分して、それぞれの時代における京都の修学旅行の様子と広報物の刊行状況について取り上げる。そして、京都が戦後から20世紀末にかけて修学旅行に対してどのように向き合い、広報物が京都における修学旅行の発展に対してどのように寄与していたのか考察する。

2 終戦直後の京都における修学旅行と広報物の刊行状況

京都市内の観光業は、終戦からわずか数年で活況を見せるようになる。1946年(昭和21)8月に五山送り火が復活すると、1950年(昭和25)までの間に祇園祭の山鉦巡行、4月の都をどりなど京都を代表する祭事が次々に再開される⁽¹¹⁾。また、1948年(昭和23)7月に外国人観光客の入国が連合国軍総司令部(GHQ)から認められるようになると、1949年(昭和24)1月には戦後初の外国人観光客を京都へ迎え入れることとなる。このように、戦後わずか数年で京都に多くの観光客が訪れるようになったことで、「京都国際文化観光都市建設法」が制定された1950年には京都を訪れた観光客数が約318万人、終戦から10年後の1955年(昭和30)にはその数が約775万人に達した⁽¹²⁾。その結果、京都は第四回内国勧業博覧会(1895年<明治28>)や昭和御大典(1928年<昭和3>)などの大規模な博覧会や祭事が開催されていた戦前までの活気を、戦後わずか数年で取り戻すことができたといえる。

そして、戦時下において休止を余儀なくされていた修学旅行についても、戦後の観光業の復調にともなって盛んに行われるようになる。終戦翌年の1946年には、修学旅行を再開する学校が現われはじめ、終戦から7年後の1952年(昭和27)には国鉄を利用した修学旅行人員の延べ数が2,958万人に達するなど、終戦から数年で全国的に修学旅行が行われるよ

うになった⁽¹³⁾。そのため、京都にも多くの修学旅行生が訪れることとなり、1953年（昭和28）に修学旅行で京都府を訪れた中学生および高校生は約66万人と、2位東京都の約57万人を抑えて全国1位を記録した⁽¹⁴⁾。その後も、1959年（昭和34）に国鉄が修学旅行専用車「ひので号」を品川―京都間で運行開始するなど、高度経済成長期において京都を含めた近畿地方への修学旅行のブームが起きていたといえる⁽¹⁵⁾。

次に当時刊行されていた広報物についてみていく。京都市観光局（現在の京都市産業観光局）では1959年当時、観光宣伝を目的として次の広報物を配布していたとされる。

（ポスター）

国内向ポスター（南禅寺・天授庵）、英文・仏文ポスター（二条城・金閣）

（パンフレット）

修学旅行のてびき、京都（ガイドブック）、古文化を訪ねて、英文ガイドブック、英文3大祭解説

（リーフレット）

和文案内用リーフレット、和文誘致用リーフレット、英文誘致用リーフレット

（その他）

観光通信（毎月）、京ガイド（毎月）、版画京の四季、はりえ葉書

（京都市観光局『観光局事業概要 昭和34年度』＜1959年＞P14より抜粋）

上記の広報物の中で、修学旅行を対象としたものは『修学旅行のてびき』である。本書は、主に学生を引率する教員や学校機関に向けて制作された広報物であると考えられる。表4は、『修学旅行のてびき』（1962年）の目次である。本書の構成として、前半で旅行の実施時期の目安や観光コースの紹介など、学校側が修学旅行を計画する上で必要な情報が掲載されている。後半では、京都市内に所在する文化財や社寺の解説など、京都の歴史文化に関する情報がまとめられている。そして巻末には、旅館やバス会社の受け入れ人数や連絡先などの情報が掲載されている。

以上の構成から、本書は京都の歴史文化に関する情報よりも、修学旅行を実施する上で必要となる情報の発信に重きを置いていたことがわかる。そして、市が旅館やバス会社など観光業者に関する情報を学校側に発信することによって、本書を介して全国の学校と京都市内の観光業者とを結びつける役割を担っていたものと考えられる。

また、このころ民間業者からも修学旅行向けのガイドブックが刊行されるようになる。例として、日本交通公社から『ジュニア旅行案内 京都』（1956 年）や『新旅行案内 12 京都とびわ湖』（1959 年）、教材研究所から『旅行手帖近畿篇 修学旅行社会科資料』（1954 年）などが挙げられる。『旅行手帖近畿篇 修学旅行社会科資料』には、監修者として大阪市貿易観光課や奈良市観光課とともに京都市観光課が名を連ねている。そのため、京都市では近隣の府県と協力して修学旅行生の誘致に力を入れていたものと考えられる。このことから、高度経済成長期において京都市が観光情報の発信や観光事業に積極的であった様子が見てとれる。

以上が、終戦直後における京都の修学旅行の様子と広報物の刊行状況である。京都市は終戦から数年で多くの観光客が訪れる人気観光地となり、なかでも修学旅行生については全国で最も訪れる街となった。そのため、市観光局では修学旅行専用の広報物を制作し、旅行を計画・実施する学校に対して積極的に観光情報の広報活動を行っていたことがわかった。

記載順	目次タイトル	記載順	目次タイトル
1	修学旅行は京都へ	12	観光交通地図
2	その時期について	13	京都の歴史
3	京都観光のてびきーのりもの・コースー	14	市の概要と文化財
4	京都を中心にした観光コース	15	年表
5	団体の輸送	16	京の年中行事
6	案内人・あっ旋業者	17	社寺の解説
7	旅館の決めかた	18	参観料金一覧表
8	土産物の買い方	19	京都あちらこちらー風景ー
9	自由行動について	20	京都の産業
10	事故防止について	21	京の宿
11	待時間の利用方法	22	バス会社一覧表

表 4 『修学旅行のてびき』（1962 年）目次

（京都市観光局『修学旅行のてびき』＜1962 年 11 月＞、表紙裏を参考に筆者が作成。）

3 東海道新幹線、名神高速道路開通後の修学旅行と広報物

1964年に東海道新幹線の東京駅—新大阪駅間が開通、1965年（昭和40）に名神高速道路の小牧IC—西宮IC間が全通すると、京都を訪れる観光客の人数はますます増加することとなる。東京オリンピックが開催された1964年（昭和39）に京都市を訪れた観光客数は、およそ1,357万人を記録した⁽¹⁶⁾。また、大阪で日本万国博覧会が開催された1970年（昭和45）に京都市を訪れた観光客数に至っては、約3,395万人と驚異的な人数を記録した⁽¹⁷⁾。そのため、日本の高度経済成長期とグローバル化にあわせて、京都への観光ブームが起きていたものと考えられる。

そして、修学旅行生に関しても同じように増加傾向であったといえる。日本修学旅行協会『校外学習』第246号（1976年12月）によると、1961年（昭和36）から1975年（昭和50）の約15年間に於いて、毎年100万人前後の修学旅行生が京都を訪れたとされている。なかでも1970年は、高校の修学旅行生が前後の年（1969年43.2万人、1971年47.5万人）と比較して倍以上となる約107.3万人を記録し、学生全体でもおよそ178.8万人の修学旅行生が京都を訪れていた⁽¹⁸⁾。これは、先述の日本万国博覧会開催にあわせて、京都を訪れた修学旅行生が相当数いたものと推察される。このように、京都への修学旅行は1960年代、70年代にかけて、よりいっそう盛んなものとなっており、このころには京都が修学旅行の旅行先として全国的に定着していたものと考えられる。

次に当時刊行されていた広報物についてみていく。京都市文化観光局（現在の京都市産業観光局）では修学旅行に関する広報物として、定期的に『修学旅行のあり方について』を刊行していた。次の表5は、1981年に刊行された『修学旅行のあり方について』の目次である。第2章で取り上げた『修学旅行のてびき』同様に、学校側が修学旅行を実施する上で必要な京都の観光情報や、京都の歴史や文化に関する情報が掲載されている。しかしながら、本書のページ数は『修学旅行のてびき』（全36ページ）の4倍以上にあたる全154ページとなっており、市から発信された観光に関する情報量は『修学旅行のてびき』よりも格段に増えていたものといえる。

本書の大きな特徴として、京都市内の見学コースを豊富に掲載している

記載順	目次タイトル	記載順	目次タイトル
1	まえがき	(4)	建築
2	京都市の修学旅行対策	6	京都の伝統産業
3	修学旅行入洛の時期について	7	社寺などのみどころ
4	見学コース設定にあたって	8	風景と景勝地
	見学コース例～小学生向	9	見学施設
	見学コース例～中学生向	10	京都の歴史
	見学コース例～高校生向	11	京都の年中行事
5	文化財観賞の手びき	12	京都の風俗・芸能
(1)	庭園	13	みやげ品の買い方について
(2)	絵画	14	ご協力お願い事項
(3)	彫刻	15	京都のみどころ案内図

表5 『修学旅行のあり方について』（1981年）目次

（京都市文化観光局『修学旅行のあり方について』＜1981年＞、表紙裏を参考に筆者が作成。）

点が挙げられる。表6と表7は、本書内で紹介されている見学コースを一覧にしてまとめたものである。見学コースは小学生向けが18コース、中学生向けが5コース、高校生向けが団体用と個人用あわせて19コースの計42コースが設定されている。見学コースは、修学旅行の一般的なコースとして設定されている8コースを除くと、「平安文化コース」や「仏像コース」など時代やジャンルを絞ったコース設定がされている。例えば、小学生向け「歴史コースA」の場合、平安期から現代までの文化財を年代順に鑑賞することで京都の歴史を学び、また街の全貌を俯瞰することを見学目的としている⁽¹⁹⁾。見学コースは、京都市街の東にある華頂山山頂の將軍塚展望台から始まり、「平安神宮→南禅寺→金閣寺→二条城→国立京都国際会館」を巡るルートとなっている⁽²⁰⁾。しかしながら、観光地を年代順に見学することを目的としたあまり、図1で示すように観光地間の移動についてはほとんど考慮されていない見学ルートとなっている。また、本書で設定されている他の見学コースについても、「歴史コースA」と同様に京都市内を縦横無尽に移動するものがほとんどである。そのため、設定されている見学コースどおりに修学旅行を実施することは実際のところは難しく、学校側である程度コースを組み替える必要性があったものといえる。

そして、本書で設定されている見学コースの中には、清水寺や金閣寺など一般的に「修学旅行の定番」と呼ばれているような観光地だけではな

く、千本釈迦堂や智積院などの名刹や京都市美術館などの文化施設も含まれている。これは、市文化観光局が市内に毎年 100 万人以上訪れる修学旅行生が特定の観光地に集中しないように、新たな観光資源の掘り起すことで学生を分散させようとしていたのではないかと推察される。山本(1981)によると、このころの京都市内はモータリゼーションによる交通渋滞の頻発や、特定の観光地に見学者が集中することが問題となっており、市でもこれらの問題に対して様々な取り組みを行っていたとしている⁽²¹⁾。そのため、清水寺や金閣寺など特定の観光地に集中しがちである修学旅行生についても、市内の他の観光地に分散させたいという考えが京都市側にあったのではないかと考えられる。つまり、『修学旅行のあり方について』で数多くの見学コースや観光地を掲載したことについては、市文化観光局が修学旅行生の分散を図る一つの施策であったのではないかと推測される。

以上が、東海道新幹線や名神高速道路開通後における京都の修学旅行の様子と広報物の刊行状況である。京都には毎年 100 万人前後、多い時は約 178 万人の修学旅行生が訪れており、修学旅行の定番として全国的に認識されるようになっていた。その状況を鑑みて、修学旅行専用の広報物に掲載する観光情報の増加や修学旅行生の分散を図るなど、引き続き修学旅行に対する施策に取り組んでいたことがわかった。



図1 「歴史コース A」で見学する観光地の位置

地図上の(1)～(6)は、「歴史コース A」で示されている見学の順番を指している。

(国土地理院ウェブサイト< <https://www.gsi.go.jp/kikakuchousei/kikakuchousei40182.html> >で公開されている淡色地図に画像加工をして筆者が作成。)

No.	コース名	コースルート	昼食場所
小学生向けコース			
1	一般コース A	清水寺→(妙法院・智積院・京都国立博物館)→三十三間堂→(西本願寺)→二条城→(京都市役所・同志社大学)→京都御所→(賀茂川)→国立京都国際会館	二条城
2	一般コース B	京都国立博物館→(西本願寺・二条城)→京都御所→(同志社大学・賀茂川)→府立植物園→(舟岡山)→天竜寺→嵐山	府立植物園
3	一般コース C	金閣寺→(龍安寺・仁和寺)→高雄→二条城→(京都市役所)→平安神宮	高雄
4	一般コース D	平安神宮→(京都大学)→比叡山ドライブウェイ→銀閣寺→(八坂神社・京都国立博物館)→三十三間堂	比叡山ドライブウェイ山頂
5	歴史コース A	(東山ドライブウェイ)→將軍塚展望台→平安神宮→南禅寺→金閣寺→(大徳寺)→二条城→(賀茂川)→国立京都国際会館	南禅寺
6	歴史コース B	東寺→(羅城門址)→金閣寺→(舟岡山)→二条城→西本願寺→青少年科学センター	二条城
7	平安文化コース	比叡山ドライブウェイ→(京都会館・鴨川・同志社大学)→京都御所→平安神宮→(八坂神社・京都国立博物館)	京都御所 御苑 休憩所
8	室町・桃山文化コース	醍醐寺→南禅寺・金地院→(八坂神社・五条大橋)→二条城→西陣織会館→金閣寺→西本願寺	二条城
9	維新・明治文化コース	平安神宮→(疏水インクライン)→青蓮院→(知恩院・円山公園)→二条城→(鴨川・同志社大学)→京都御所→東本願寺	
10	建築コース A	平安神宮→(岡崎公園・京都会館)→清水寺→三十三間堂→京都国立博物館→(東本願寺・西本願寺)→嵐山→天竜寺	京都国立博物館
11	建築コース B	平安神宮→京都御所→国立京都国際会館→二条城→清水寺	宝池畔
12	仏像コース	広隆寺→(天竜寺)→嵐山→靈山観音→国立京都博物館→三十三間堂	靈山観音
13	庭園コース A	国立京都国際会館→(府立植物園・大徳寺)→金閣寺→嵐山→二条城→平安神宮	嵐山
14	庭園コース B	天竜寺→(金閣寺・舟岡山)→大徳寺→府立植物園→(賀茂川・京都大学)→銀閣寺→平安神宮	府立植物園
15	伝統産業コース	清水焼団地見学コース→京都市伝統産業会館→西陣織会館→友禪文化会館	
16	文化施設コース	国立京都国際会館→岡崎公園(動物園・美術館・京都会館・平安神宮・京都市伝統産業会館等)→京都国立博物館→梅小路蒸気機関車館	
17	洛西コース	仁和寺→高雄→(嵐山・高雄パークウェイ)→嵐山→天竜寺	嵐山
18	洛東・洛北コース	大原(三千院・寂光院)→(八瀬)→比叡山ドライブウェイ→(京都御所・五条大橋)→清水寺	比叡山ドライブウェイ山頂
中学生向けコース			
1	市内一般コース	平安神宮→三十三間堂→清水寺→京都タワー→東映太秦映画村→嵐山→金閣寺→二条城→西陣織会館	嵐山
2	一般コース	二条城→嵐山→嵐山・高雄パークウェイ→(保津川溪谷)→金閣寺→国立京都国際会館→平安神宮	高雄
3	京滋コース	二条城→東寺→名神高速道路→琵琶湖大橋→比叡山→平安神宮→清水寺	比叡山
4	京都の近代コース	東映太秦映画村→西陣織会館→国立京都国際会館→岡崎公園(国立近代美術館・京都市伝統産業会館または平安神宮)	国際会館付近
5	産業コース	京都友禪文化会館→東映太秦映画村→嵐山→嵐山・高雄パークウェイ→中川(北山グリーンガーデン)→西陣織会館	高雄。また夕食は洛南会館が紹介されている

表6 『修学旅行のあり方について』に掲載されている見学コース (小・中学校向け)

表内の () はバスの車内から見学できる場所として本書内で紹介されている。

見学コースは「貸切バス」での移動を前提に設定されている。

(京都市文化局観光課『修学旅行のあり方について』<1981年>、P4-P18を参考に筆者が作成)

No.	コース名	コースルート	昼食場所
高校生向けコース			
1	一般コース A	京都タワー→二条城→嵐山(岩田山・天竜寺・亀山公園)→竜安寺→衣笠・紫野・上賀茂の住宅地→国立京都国際会館	嵐山
2	一般コース B	平安神宮→疏水・インクライン・発電所→南禅寺→三十三間堂→清水寺→伏見桃山城→東寺	清水寺
3	歴史をしのび 洛西の史跡を めぐる	二条城→嵐山→大覚寺→嵐山・高雄パークウェイ(保津川溪谷)→高雄・梅尾(北山丸太)→高山寺・石水院→御堂が池古墳→(宇多野台地植木栽培地帯)→仁和寺	高雄
4	洛北の文学史の あとをたずねる	大原(寂光院・三千院)→詩仙堂→大徳寺・塔頭	大原
5	金閣・銀閣寺と 五山文学のあと をおとずれる	金閣寺→大徳寺・塔頭→銀閣寺→南禅寺→円山公園→東福寺	京都御所
6	美術のあとを たどる A 市内西部コース	東寺→西本願寺→広隆寺→嵐山→大覚寺→堂本美術館	嵐山
7	美術のあとを たどる B 市内西部コース	京都市美術館→智積院→国立博物館→三十三間堂・養源院→西本願寺	京都国立博物館
高校生向け 個人コース			
1	平安グループ	平安神宮→六波羅蜜寺→東寺→羅城門跡→北野天満宮	
2	鎌倉グループ	知恩院→円山公園→花見小路の家並見学→建仁寺→三十三間堂→西本願寺→千本釈迦堂	
3	室町グループⅠ	西陣跡→室町幕府跡→相国寺→銀閣寺→哲学の道→南禅寺→建仁寺→東福寺	
4	室町グループⅡ	天竜寺→竜安寺→等持院→金閣寺→船岡山→大徳寺	
5	安土・桃山 グループ	智積院→西本願寺→二条城→大徳寺	
6	建築コース	二条城→二条陣屋→西本願寺→東寺→東福寺→三十三間堂→清水寺	
7	仏像コース	六波羅蜜寺→三十三間堂→東寺→広隆寺→千本釈迦堂	
8	奥嵯峨コース	小督塚→野宮→常寂光院→落柿舎→二尊院→祇王寺→化野念仏寺→釈迦堂→大覚寺	
9	市中の史跡を たずねるコース	壬生寺→二条陣屋→平安博物館→高瀬川一之船入→円山公園→高台寺→清水寺	
10	静寂さを求める コース	陽明文庫→光悦寺→源光庵→正伝寺→神光院	
11	山科・醍醐 コース	清水焼見学コース→勧修寺→随心院→醍醐寺→法界寺	
12	伏見・桃山 コース	伏見稲荷大社→藤森神社→欣浄寺→寺田屋→御香宮神社→桃山御陵→伏見桃山城	

表7 『修学旅行のあり方について』に掲載されている見学コース（高校生向け）

高校生向けコースは「貸切バス」、高校生向け個人コースは「公共交通機関」での移動を前提として設定されている。

（京都市文化局観光課『修学旅行のあり方について』＜1981年＞、P18-P27を参考に筆者が作成）

4 昭和末期から平成初期の修学旅行と広報物

1980年代半ばになると、高校を中心に「スキー修学旅行」や「海外修学旅行」などを行う学校が現われ、修学旅行にも多様性がみられるようになる。そのため、これまで旅行先の定番であった近畿や東京以外の地域に向けて修学旅行を実施する学校が増加することとなった。

「スキー修学旅行」は、体験型の修学旅行として1980年代後半に盛んとなる。主に西日本の高校を中心に実施されるようになり、1989年（平成元）のスキー修学旅行の実施率は高校全体の約18.4%を占めていた⁽²²⁾。とくに長野県では当時志賀高原や蓼科高原、菅平高原を中心にリゾート開発が進んでいたこともあり、1989年には約85万人のスキー修学旅行客を受け入れていた⁽²³⁾。「海外修学旅行」は、スキー修学旅行同様に1980年代後半から中学校、高校ともに増加しはじめる。1992年（平成4）には全国で315校、約7万6千人が修学旅行で海外を訪れており、そのうち66.4%（約5万1千人）の学生が韓国や中国、台湾など東アジアを旅行先としていた⁽²⁴⁾。

このように、修学旅行の行き先や種類が多様化したことにより、京都では1984年（昭和59）の146万人をピークに修学旅行生が減少傾向となっていた⁽²⁵⁾。また、修学旅行の実施対象となる小学生から高校生までの人口についても、1981（昭和56）年の577万人をピークに減少の一途をたどっており、1998年（平成10）時点の推計で2002年（平成14）には約386万人になると予想されていたことから、今後さらに京都を訪れる修学旅行生が減る見通しとなっていた⁽²⁶⁾。

そこで、京都市では外国人観光客の誘致などの他の観光政策とともに、修学旅行生を呼び込むための政策に取り組むこととなる。市では1990年から2000年前後にかけて、①『21世紀（2001年）の京都観光ビジョン—京都市観光基本構想—』（1992年）、②『京都市観光振興基本計画—市民とパートナーシップでつくる21世紀の観光都市・京都—』（1998年＜平成10＞）、③『京都市観光振興推進計画—おこしやすプラン21—』（2001年＜平成13＞）の計3つの事業計画を打ち出した。

表8は、京都市が上記の3つの観光事業計画内で述べた、修学旅行に関する提言と政策をまとめたものである。表8をみると、大学のキャンパス

政策内容	記載資料	記載ページ
「大学のまち京都を生かした企画」など修学旅行での試みを増幅させる	①	P16
地方での誘致懇談会の活発化	①	P16
京都観光サービス向上委員会でクレーム改善	①	P16
修学旅行相談センターの設置	②	P21
優待パスポートの発行	②	P21
新学習指導要領に対応した修学旅行生のための体験学習プログラムの充実	③	P13
インターネットによる修学旅行相談の実施	③	P13
修学旅行誘致用 CD-ROM を活用した全国の学校や旅行会社などへの誘致促進	③	P13
旅行会社との連携による修学旅行誘致活動の強化	③	P13
班別活動に対応した「修学旅行生優待パスポート」の充実	③	P13
高校修学旅行生の誘致を図る「キャンパス体験ツアー」の充実	③	P13

表8 京都市による1990年代から2000年代にかけての修学旅行に関する提言および政策

記載資料欄の丸数字は、本文中に示した3つの資料を指している。

〔『21世紀「2001年」の京都観光ビジョン—京都市観光基本構想—』<1992年>、『京都市観光振興基本計画—市民とパートナーシップでつくる21世紀の観光都市・京都—』<1998年>、『京都市観光振興推進計画—おこしやすプラン21—』<2001年>をもとに筆者が作成。〕

見学や体験学習プログラムの充実など、従来までの神社仏閣の見学を中心とした修学旅行から脱却しようとする市の様子があうかがえる。このことから、スキー修学旅行や海外修学旅行など体験型の修学旅行が人気を集めていたことに対して、京都市は強い危機感を抱いていたものと推測される。また、市では修学旅行について『京都市観光振興基本計画』内で、「修学旅行生の受入れは京都観光の原点であり、将来のリピーターとして期待できるため、その積極的な対応が必要である」という認識を示している⁽²⁷⁾。そのため、市にとって修学旅行は単に100万人を超える大口の観光客として捉えるのではなく、「将来の京都観光のリピーター」としての可能性を持つ大切なお客様であると考えていたと推察される。以上のことから、京都市では観光業において修学旅行を重要視し、将来再び観光客として京都を訪れることを見据えて修学旅行生の誘致に積極的に取り組んでいたものといえる。

そして、実際に京都市産業観光局が行った修学旅行に関する観光宣伝や事業について、次の3つが挙げられる。京都市産業観光局商工部経済企画課『平成8年度産業観光局事業概要』（1996年）によると、市産業観光局では「修学旅行個別誘致活動の実施」、「修学旅行生のための『体験学習』」、

「修学旅行誘致共同事業（キャンパス体験ツアー）」の3点に取り組んでいたと記されている。「修学旅行個別誘致活動の実施」は、京都への新たな修学旅行客の獲得のために市産業観光局が開催した懇談会である。本書では1995年9月5日と6日に、熊本県と鹿児島県教育委員会・高校・旅行代理店に向けて開催したと記されている。「修学旅行生のための『体験学習』」は、京都を訪れた修学旅行生に有意義な時間を過ごしてもらうために設定された体験学習コースである。体験学習コースは、「伝統芸能コース」と「修養コース」の2つが設定されており、前者は狂言や十二単衣の着付け体験など、後者は座禅や法話などが体験学習の内容例として挙げられる。この体験学習企画の参加者数は、伝統芸能コースが93校11,461人、修養コースが35校3,668人であったと本書に記されている。「修学旅行誘致共同事業（キャンパス体験ツアー）」は、京都市内に大学機関が数多く立地していることに着目し、17の私立大学と共同で大学見学企画を実施したものである。こちらには、15校1,956人が参加をしたと本書内で記されている⁽²⁸⁾。

このように、京都市産業観光局では修学旅行に対して様々な事業を行っており、常に新たな修学旅行のあり方と将来の観光客の獲得を目指していたといえる。その結果、2000年（平成12）以降に京都を訪れた修学旅行生の人数は、2000年の99万人と新型インフルエンザの流行を受けた2009年（平成21）の96万人を除き、2017年（平成29）まで毎年100万人以上を維持することできた⁽²⁹⁾。

次に当時刊行されていた広報物についてみていく。表9は、京都市文化観光局観光部宣伝課が1992年に制作した、観光に関する広報物の一覧である。外国人観光客に向けた観光パンフレットが大多数を占めているものの、修学旅行用の広報物として『修学旅行ハンドブック』を制作していたことがわかる。『修学旅行ハンドブック』は、第2章で取り上げた『修学旅行のてびき』、第3章で取り上げた『修学旅行のあり方について』などとは異なり、修学旅行生に向けた学習用の教材として制作されたものと考えられる。

表10は、『修学旅行ハンドブック』（1992年）の目次である。表10より、本書の内容のほとんどが地域別ガイドで占められており、京都の観光地や歴史文化の解説・紹介に主眼を置いた構成であることがわかる。第2章および第3章で取り上げた広報物とは異なり、バス会社や旅館一覧など

広報物	言語
観光案内用リーフレット（地図）京都	日本語
修学旅行用冊子 修学旅行ハンドブック	日本語
観光案内用冊子 京のみちを歩く	日本語
パンフレット KYOTO	英語
パンフレット KYOTO GUIDANCE	英語
パンフレット 교토（京都）	韓国語
パンフレット GUIDE DE KYOTO（京都案内）	フランス語
パンフレット KYOTO BESICHTIGUNGSFÜHRER	ドイツ語
観光案内用冊子 京都トラベルガイド	英語・韓国語・日本語
観光地図 MAP OF KYOTO	英語・日本語
社寺・施設料金表	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 洛東編	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 洛西編	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 洛南編	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 洛北編	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 洛中編	日本語
新しい観光コース紹介用冊子 京都散策ガイド 合本	日本語
観光情報 京都（月刊）	日本語

表9 1992年に京都市文化観光局観光部宣伝課が刊行した観光に関する広報物 一覧
（京都市文化観光局『事業概要 平成45年』＜1993年＞、P115を参考に筆者が作成。）

記載順	目次タイトル	記載順	目次タイトル
1	まえがき		大原・鞍馬・貴船
2	位置・地勢と気象	6	地域別ガイド IV 洛中
3	地域別ガイド I 洛東		北大路通りから丸太町通りへ
	銀閣寺から岡崎公園へ		丸太町通りから五条通りへ
	栗田口から清水寺へ		五条通りから京都駅へ
	祇園から三十三間堂へ	7	地域別ガイド V 洛南、山科、醍醐地域
	泉涌寺・東福寺		洛南
4	地域別ガイド II 洛西地域		伏見
	嵐山・嵯峨野		山科・醍醐
	高雄・清滝	8	地域別ガイド VI 京都の周辺
	京福電鉄沿線	9	文化財鑑賞の手引
	松尾から大原野へ		建築
5	地域別ガイド III 洛北		庭園
	上賀茂から下鴨へ		彫刻・仏像
	西賀茂から紫野、金閣寺へ		絵画・美術工芸品
	北白川から八瀬、岩倉へ	10	京都の主な祭り、伝統行事一覧

表10 『修学旅行ハンドブック』（1991年）目次

（京都市文化観光局観光部宣伝課『修学旅行ハンドブック』＜1991年＞、P1を参考に筆者が作成。）

の情報については一切掲載されていない。そのため、修学旅行生が事前学習や班別行動の際に用いることができるように制作された教材のような広報物であるといえる。

以上が、昭和末期から平成初期における京都の修学旅行の様子と広報物の刊行状況である。京都市では1980年代以降に顕著となった修学旅行の多様化に合わせて、複数の観光事業計画内で修学旅行に関する提言や政策を策定した。そして、京都市は様々な観光事業や広報物を通して修学旅行生に京都の歴史文化の関心を持ってもらうのと同時に、将来の観光客獲得を目指していたことがわかった。その結果、小学生から高校生の人数が年々減少しているなかで、毎年100万人前後の修学旅行生を維持するなど、観光政策や事業には一定の効果があったものといえる。

5 おわりに

ここまで、「終戦直後」、「東海道新幹線および名神高速道路開通後」、「昭和末期から平成初期」の3つの時代に区分して、京都の修学旅行の様子と広報物の刊行状況について取り上げた。

京都は終戦直後から現代に至るまで人気の修学旅行先であり、京都市では修学旅行を「京都観光の原点」と位置づけて、数多くの観光事業や広告宣伝に取り組んでいた。それは、京都を訪れた学生に修学旅行を楽しんでもらうことや、学生に京都の文化や歴史を認識してもらうだけでなく、将来の京都観光のリピーターを作る目的もあわせ持っていたからであることがわかった。そのなかで、修学旅行の広報物についても数多く制作されており、京都の観光情報や歴史文化を発信する上で重要なツールとして用いられていた。

以上のことから、京都では修学旅行を観光の原点と位置付けて様々な事業を行っており、将来の観光リピーターを呼び込むために積極的に取り組んでいた。そのなかで広報物は、インターネットが普及する以前において京都市内の観光促進と歴史文化を全国に広める重要なツールとして、修学旅行生の誘致に大きく貢献していたものと結論付けた。

参考文献

- 阿部純一郎「占領期日本の国際旅行問題：観光史の＜空白＞をめぐって」『椋山女学園大学研究論集 社会科学篇』第44号（椋山女学園大学、2013年）
- 井口和起「京都へのまなざし—修学旅行案内と京都」『京都観光学のススメ』（人文書院、2005年3月）
- 京都市観光協会『京都観光50年の歩み』（京都市観光協会、2011年2月）
- 菅沼明正「修学旅行とナショナリズム—戦後の奈良・京都への旅行の再開・拡大過程」『Keio SFC journal』第17巻1号（慶應義塾大学湘南藤沢学会、2017年）
- 杉野國明『観光京都研究叙説』（文理閣、2007年7月）
- 竹内秀一「修学旅行の歴史—修学旅行はなぜ生まれ、どう進化を遂げてきたのか—」『運輸と経済』第79巻第6号（一般財団法人 交通経済研究所、2019年6月）
- 峯俊智穂「戦後の京都市における『国際観光都市』づくり—京都国際文化観光都市建設法の成立期に着目して」『政策科学』第27巻4号（立命館大学政策科学会、2020年）
- 山上徹『京都観光学 [改訂版]』（法律文化社、2007年12月）

注

- (1) 日本修学旅行協会『教育旅行年報「データブック 2019」』（日本修学旅行協会、2019年）、P12-13,24-25。
- (2) 日本修学旅行協会名古屋事務所『2018年度 平成30年度実施分 修学旅行実施状況調査』（日本修学旅行協会、2019年）、P3。
- (3) 学校法人暁学園「暁小学校 | 学生生活 | 年間行事予定」https://www.akatsuki.ed.jp/akatsuki-e/seikatsu_nenkangyoji.html（2022年6月3日閲覧）
- (4) 2020年度に開催された修学旅行は、コロナ禍の影響で旅行先が県内となった例がほとんどである。また、2021年度に開催された修学旅行についても、旅行先が県内、近畿地方と学校によって違いがみられる。
- (5) 京都観光推進協議会「きょうと修学旅行ナビ 歩く・学ぶ・体験する」<https://shugakuryoko.kyoto.travel/>（2022年5月30日閲覧）

- (6) 京都市交通局「京都修学旅行 1day チケット (修学旅行用)」<https://www.city.kyoto.lg.jp/kotsu/page/0000049161.html> (2022 年 5 月 30 日閲覧)
- (7) 京都観光推進協議会「きょうと修学旅行ナビ | 京都修学旅行パスポート」<https://shugakuryoko.kyoto.travel/passport/> (2022 年 5 月 30 日閲覧)
- (8) 菅沼明正「修学旅行とナショナリズム：戦後の奈良・京都への旅行の再開・拡大過程」『Keio SFC journal』第 17 巻 1 号 (慶應義塾大学湘南藤沢学会、2017 年)
- (9) 山上徹「国際文化観光都市・京都と修学旅行」『京都観光学 [改訂版]』(法律文化社、2007 年 12 月)、P138-161。
- (10) 塚本圭一「京都におけるエコ・修学旅行の研究」『北見大学論集』第 39 号 (北海学園北見大学学術研究会、1998 年)
- (11) 峯俊智徳「戦後の京都市における『国際観光都市』づくり—京都国際文化観光都市建設法の成立期に着目して」『政策科学』第 27 巻 4 号 (立命館大学政策科学会、2020 年)、P225、226。
- (12) 京都市観光局『観光京都 10 年のあゆみ：昭和 23-32 年』(京都市観光局、1958 年)、P2、P3、付表 P1。
- (13) 日本修学旅行協会『教育旅行年報「データブック 2021」』(日本修学旅行協会、2021 年)、P49、50。
- (14) 日本修学旅行協会『昭和 28 年度修学旅行実態調査：中学校・高等学校』(日本修学旅行協会、1955 年)、P5、6。
- (15) 注 8 と同書。P292 を参考。
- (16) 京都市『京都市統計書 昭和 40 年版』(1966 年)、P302。
- (17) 京都市『京都市統計書 昭和 46 年版』(1972 年)、P285。
- (18) 日本修学旅行協会『校外学習』第 246 号 (1976 年 12 月)、P15。
- (19) 京都市文化観光局『修学旅行のあり方について』(1981 年)、P7。
- (20) 平安神宮は平安期の正庁と朝堂院を模して 1895 年 (明治 28) に建設され、南禅寺の法堂や金閣寺舍利殿はそれぞれ焼失し後に再建されたものであるが、本書内では往時の様子や文化を理解できる建築として、それぞれ平安・鎌倉・室町期の文化財と取り扱っている。(注 19 と同書。P7 参照。)
- (21) 山本昭夫「京都市観光行政の課題」『都市政策』第 22 号 (神戸都市問題研究所、1981 年 1 月)、P40-46。
- (22) 市河勉・奥田功夫・吉池宏彰「スキー修学旅行に関する一考察」『松山東雲短期大学研究論集』第 24 号 (松山東雲短期大学、1993 年 12 月)、P155。

- (23) 日本観光協会『月刊観光』第332号（1994年5月）、P20、21。
- (24) 檜山信夫「海外修学旅行の現状」『観光文化』第98号（日本交通公社、1993年3月）、P30、31。
- (25) 京都市産業観光局観光部観光企画課「京都市観光振興基本計画」（1998年）、P8。
- (26) 注25と同書。P8。
- (27) 注25と同書。P8。
- (28) 京都市産業観光局商工部経済企画課『平成8年度 産業観光局事業概要』（1996年）、P74、75。
- (29) 京都市産業観光局観光 MICE 推進室『京都観光総合調査 令和元年（2019年）1月～12月』（2020年9月）、P6。

（本学特別専攻生）

キーワード

京都観光、修学旅行、観光情報、出版、京都市観光課、観光